慶應義塾

平成26年（2014）
6|6［金］
慶應義塾新聞（ケイオウギジュク）
Keio University
〈企画・制作〉産経新聞社営業局

この紙面は慶應義塾大学のPR企画として掲載しています。

お問い合わせ
慶應義塾　広報室
TEL 03-5427-1541

自我作古

「自我作古」は「我より古（いにしえ）を作（な）す」と読み、前人未到の新しい分野であっても困難や試練に耐えて開拓にあたる勇気と使命感を表す。この語は慶應義塾において、慶應4年起草『慶應義塾之記』の中で初めて用いられ、草創期の塾生たちが、西洋文明をいち早く取り入れ日本の近代化に貢献せんとした気概を示したものといえる。昭和14年、小泉信三塾長（当時）が藤原工業大学（現・慶應義塾大学理工学部）設立時に「我より古を作す」と題して訓示し、以来多くの塾生がこの言葉を胸に学問にまい進している。

実学（サイエンス）を世界へ——我より古（いにしえ）を作（な）す

少子高齢社会に挑む科学・研究

世界に類をみない超高齢社会となった日本。将来の持続可能な社会を実現するために、いかに次世代を育み、壮年者の健康を維持し、心身ともに豊かな長寿を実現するかが課題となっている。10学部を有する総合大学である慶應義塾大学は医学部から文学部・商学部まで学内の研究力を結集して、課題の解決とそれを支える社会システムの研究に取り組んでいる。大きな期待を集めるのは、遺伝情報を診療や予防に生かす、新しい医療の発展だ。

実用化が進む遺伝子診断

臨床遺伝学センター

病気は食生活や感染症など、環境によって発症する場合と、生まれつきの遺伝子の変化や体質によって発症する場合があり、これらの組み合わせによって、発症したり重症になったりする。医学部では90年代から遺伝性の病気の解明など最先端の研究に取り組んできたが、その成果を臨床現場である大学病院で活用するために、2011年には、「臨床遺伝学センター」が設立された。センターでは、遺伝性疾患の診療を担当するとともに遺伝情報の臨床研究と人材育成が進められている。

難病の診断に活用

小児科医でもある小崎健次郎臨床遺伝学センター長によると、多くのいわゆる小児難病の原因は、生まれつきの遺伝子の変化によって起こることが、最近の国内外の研究により明らかにされつつある。慶應義塾大学病院では昨年から、病気の原因となりうる約5千個の遺伝子を同時に調べる検査を外来で提供している。この検査により原因が判明し、新たな診療方針が示された例も少なくない。外来では遺伝カウンセラーと連携し、わかりやすい説明に努めている。分析の結果、全く新しい病気が見いだされることもあり、その成果は学内外の基礎医学研究者との治療研究に発展している。遺伝情報は究極の個人情報であるため、厳重な情報管理体制の整備も怠りない。

遺伝子医療の可能性

小崎教授によると、ヒトの遺伝子は約2万個あるが、一見、健康に見える人でも、健康に影響を与える可能性のある遺伝子の変化を持っている。多くの遺伝子の変化は病気と無関係だが、中に病気の原因となりうる変化もある。今後、力を入れたいのは個人が持っている遺伝子の違いを調べて対策を打つことだそうだ。例えば、特定の薬剤に副作用が出やすいかどうかを事前に確かめるなど、診療において遺伝子診断の持つ可能性は大きい。「さまざまな角度から分析した遺伝情報を医師が幅広く診療に役立てる、そんな未来が目の前にあるのでは。その時に重要なのは、遺伝情報の解釈に習熟した医療者が、個々人の状態に応じた適切な判断を下すこと」

慶應義塾の教育理念の一つに半学半教がある。教える者と学ぶ者の分を定めず、相互に教え合い学び合う仕組みの意である。小崎教授は、若手医師・学生・看護師・カウンセラー・技師が診療科を超えて、顔を突き合わせて勉強・議論する「学塾」を主宰し、毎週の論題は患者さんの経過、遺伝子解析の結果から心理的・倫理的考察におよぶ。より良い未来の医療を目指す若者たちに半学半教の現場を提供し、専門分野や職種の壁を越えて遺伝情報を真に医療に生かせる人材の育成を目指している。

慶應義塾大学医学部 臨床遺伝学センター長・米国臨床遺伝専門医・小児科専門医
小崎 健次郎氏

2018年 慶應義塾大学病院完成予想図

2017年、医学部は創立100年を迎える。その年度に合わせて新病院棟（1号館）の竣工（しゅんこう）が予定されている。診療科の壁を取り払った総合的なクラスター診療などの最良の医療、最先端の医学研究を実践する日本の医学・医療を支える拠点となることが期待されている。
▶新病院棟建設事業ホームページURL　www.nhwp.keio.ac.jp

新しい医療で豊かな長寿社会実現へ

国内外から注目の百寿者研究

百寿総合研究センター発足

世界でもトップクラスの長寿社会が実現したいま、健康に年齢を重ねていくことは誰にとっても大きな関心事となっている。「百寿者」（100歳以上の高齢者）の方々は、環境・遺伝子の両面から良い要素を併せ持っているに違いない。この仮説のもと、医学部では92年からユニークな百寿者研究をスタート、健康長寿のメカニズムの解明を学際的に進めている。

今年4月には、「百寿総合研究センター」が新設された。20年以上にわたる研究のなかで入手した百寿者800人の細胞サンプルをもとに「百寿バイオバンク」の基盤をつくり、遺伝子解析も含めて国内外の諸機関との連携推進を図る。百寿に関する包括的な研究の拠点として、今後の超高齢社会に対する医学・医療の発展と人材育成を目指していく方針だ。

高齢化に伴って増えている高血圧や糖尿病といった生活習慣病は、さまざまな要素が重なって起こる。小崎教授は「その究明には遺伝子のデータだけでなく、何百人、何千人の生活習慣と診療記録が必要」と、医学部全体の計画を明かす。生活習慣病の患者さんのデータと、究極の健康者である百寿者のデータを相互に比較することで、病気が起きる原因が明確になるはずだ。

ビッグデータが拓く未来

さまざまな疾患の患者さんや多数の百寿者の解析から、疾患発症や健康長寿のメカニズムを解明する。こうしたいわゆるビッグデータの利用は最近話題にのぼることが多いが、「一部でビジネス利用が先行して語られていることを懸念している」と小崎教授。病気の方も健康な方も、お互いが持つ医療・健康データを社会全体で共有し、医学の発展とより良い医療の確立を通じて、文字通り助け合うというコンセプトこそが重要なのだ。慶應義塾大学が文科系学部も有する総合大学であることの安心感にも言及した。技術が開発されたとき、その社会的意味に目を向ける、ブレーキとアクセルがともに機能していることは、大学が社会の先導者を目指す際には欠かせない。

◇　◇　◇

多様な個性を持つ人々が、健康でより良い生活を送るため、慶應義塾大学の知性が大いに生かされていくだろう。

「世界の長寿モデルに」

慶應義塾長 清家（せいけ） 篤（あつし）氏

今日の日本は世界一の長寿国となりました。長寿は栄養、衛生、住居、社会保障の水準などからなる総合的な生活水準の高さを反映するものです。日本の平均寿命の高さに世界中の人が驚嘆してくれるのはそのためです。

その長寿の結果として起きた高齢化は従って、日本の経済社会の成功の結果というべきものです。もちろん高齢化は社会保障負担増や経済成長抑制の要因となるなど、われわれに課題もつきつけてきます。しかしそれは智恵を絞ることで克服可能な問題です。それは世界に冠たる長寿社会を真に豊かにするための挑戦というべきものでしょう。

慶應義塾大学は、高齢社会の問題を考える際に重要な医学に代表される自然科学、経済学に代表される社会・人文科学などあらゆる分野で優れた研究実績を積み重ねており、それらの学問成果を総合して豊かな高齢社会を作るための叡智を生み出すことができます。

世界一の長寿・高齢大国の日本で、活力ある豊かな高齢社会のモデルを確立することができれば、それは続いて高齢化する他の国々のよいお手本になります。慶應義塾大学はそうした豊かな高齢社会を作るための、日本と世界への知的貢献を続けてまいります。

1978年慶應義塾大学経済学部卒。83年同大大学院商学研究科博士課程単位取得退学。商学博士。同大商学部長などを経て、2009年より現職。

地域・国を超えて広がる活動

ラオスで医療系三学部（医・看・薬）の研修を実施

慶應義塾大学では医学部・看護医療学部・薬学部の医療系三学部合同で、「ラオス・プライマリヘルスケア保健医療チーム活動プロジェクト」を行っている。東南アジア・ラオスに赴きJICA、UNICEF、WHOなどの保健医療支援活動や、現地医療機関などを見学。さらに農村で一日ホームステイをして、現地住民に健康指導をしたり、村の小学校で健康教育を行ったり、現地の医療系学生との交流カンファレンスもある。これらの活動は、現地のヘルスケアを取り巻く状況や、異文化への理解を深めるとともに、今後の国際協力のあり方について考える機会となっている。

現地の子どもたちと交流

復興に寄りそう「南三陸プロジェクト」

東日本大震災の被災地に対して、ボランティアや寄付などさまざまな支援活動を行っている慶應義塾大学。中でも甚大な被害を受けた宮城県南三陸町には50年前から慶應義塾の学校林がある。以前から交流はあったが、2011年度から学生・教職員が支援活動「南三陸プロジェクト」をスタートさせた。2013年度は5月、夏休み、11月、春休みを通して延べ243人が現地を訪れ、森の整備等の活動を行った。長期的に南三陸町を支援し教育に生かすことで、復興に寄与していくことを目指している。

南三陸町での活動

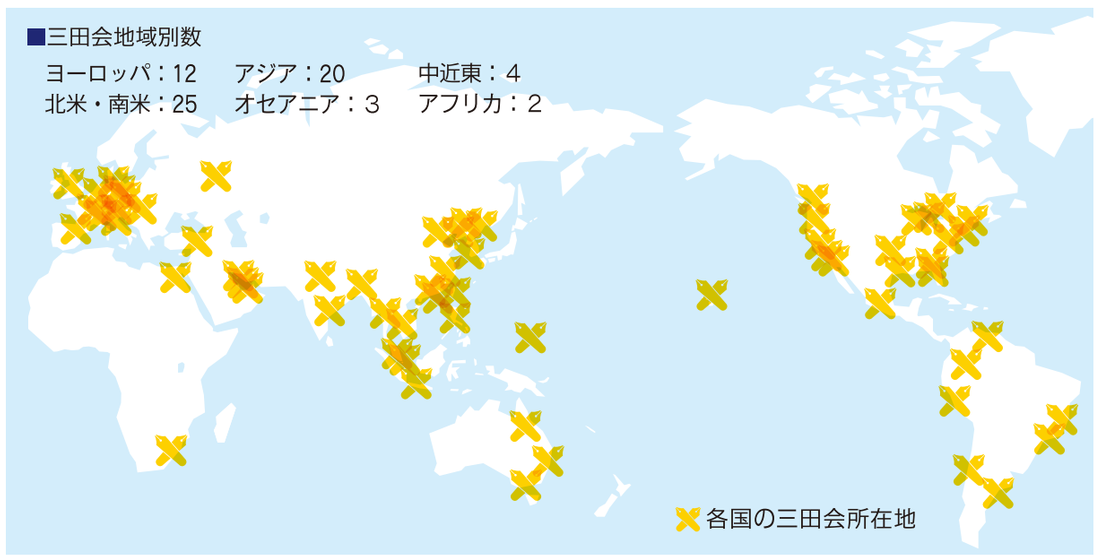
名門寄宿学校への派遣留学—高校生を世界へ

近年、国際社会をリードする人材の育成がますます求められている。慶應義塾の高等学校4校では従来から各校独自の国際交流プログラムに取り組んできたが、本年から共通のプログラム「慶應義塾一貫教育校派遣留学制度」が創設された。

この制度は各校の枠を超えて生徒を選抜し、米・北東部にある寄宿学校の名門10校Ten Schoolsのうちの2校へ1年間派遣するもの。留学した生徒は奨学金として、費用を給付され、派遣終了後には原則留年せずに進級できる。

Ten Schoolsは伝統、難易度、生徒の質などから「高校のアイビーリーグ」と評される、アメリカの私立高校の最高峰。世界中から集まる同世代のライバルと切磋琢磨（せっさたくま）することで、次世代を担うグローバル人材の輩出が期待される。来年はさらに英国のパブリックスクールも派遣先に加わる。

世界に広がる卒業生—三田会ネットワーク



慶應義塾大学の卒業生は約35万人。卒業後も多くの「塾員」（卒業生）が慶應義塾とのつながりを大切にし、同窓会組織「三田会」は800を超えている。海外三田会は現在66。世界各国で塾員が集い、後輩の学生のサポートなども含めたさまざまな活動を行っている。

三田会のグローバルなネットワークは、どの大陸でも私の心強い味方です!

ジュネーブ三田会
荒井由希子さん

国連ILO多国籍企業局シニア・スペシャリスト。2013年は本業を休職し、東京2020招致活動で国際部ディレクターとして活躍